

飛騨高山地域での多文化共生推進方策の研究

2021年12月4日

東京都市大学 西山敏樹
西山研究室 3 年研究室生



本研究の背景と目標

- ・ 東京都市大学・西山研究室は、ユニヴァーサルデザインを専門にしている。都市システムを誰もが過ごし易いユニヴァーサルデザインにすることは重要な都市課題である。
- ・ SDGsへの関心も高くなっており、誰ひとり取り残さないことが社会づくりの一大テーマになっている。行政に止まらず、民間企業及び市民社会の役割も益々高まっている。
- ・ あらゆる関係者が多文化共生の推進に向けて連携をするグローバルパートナーシップの重要性も主張されている。



本研究の背景と目標

- ・ 無論，高山地域でも多文化社会の多様性と多文化共生をどのように実現するのか，アフターコロナも見据えながらインクルーシブな社会実現の為の方策検討が急務である。
- ・ 以上の社会的背景から，都市大西山研究室では飛騨高山地域での多文化共生の推進策を研究している。研究室では多文化共生の推進にあたられる方とのワークショップや，海外からの居住者との交流ワークショップ，その他の各種調査を経て多文化共生推進方策の提案を目標に活動した。



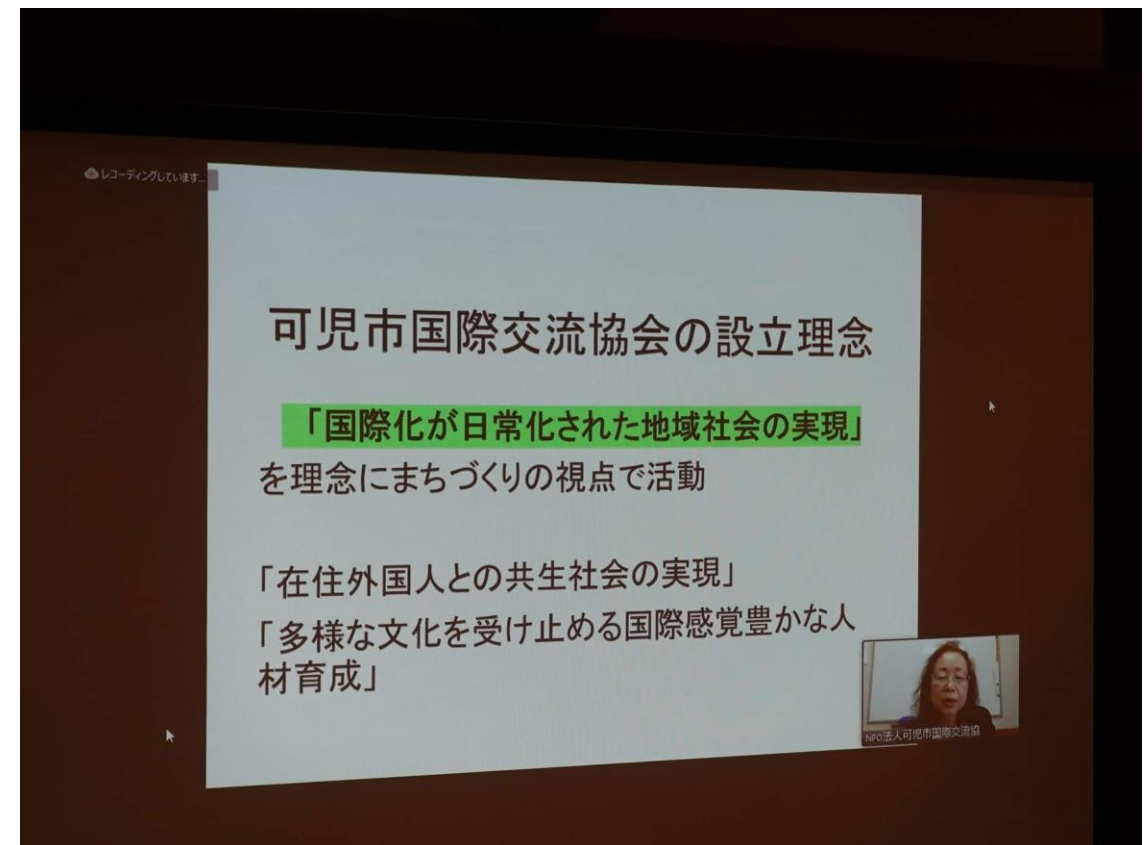
本研究の手法と経過

- ①高山を含む岐阜地域での多文化共生の実状を学ぶワークショップ (2021/07/31).
- ②海外からの居住者との交流ワークショップ (2021/08/29).
- ③高山市自体の動向を知る勉強会 (2021/09/10).
→飛騨高山大学連携センター江尻副センター長による.
- ④研究室メンバーによる現地調査 (2021年7月～10月)



本研究の手法と経過

①高山を含む岐阜地域での多文化共生の実状を学ぶワークショップ (2021/07/31).

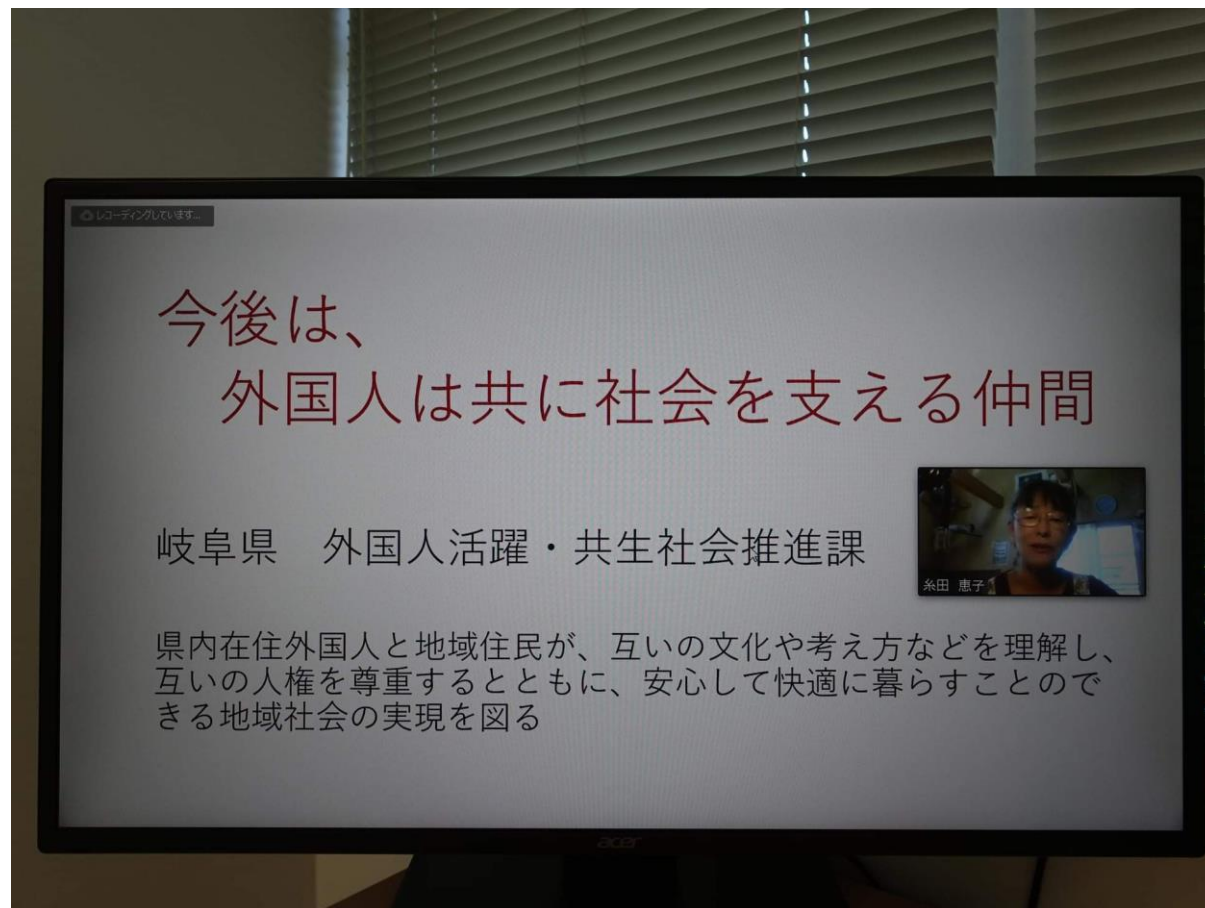


高山市海外戦略課，多文化共生を推進する団体Family Planet Japan, NPO 法人可児市国際交流協会からレクチャーを受け学習.



本研究の手法と経過

②海外からの居住者との交流ワークショップ(2021/08/29).



岐阜県多文化共生推進員の方に取り組みを説明頂いた。また、エジプト出身の宿泊施設勤務の男性1名，ベトナム出身の技能実習生の女性2名に参加頂いて，実際に高山市での生活上の問題点や課題，ニーズのヒヤリングを実施した。



高山の特徴・特性も考慮した 多文化共生への提案



防災への着目

- ・ 外国人の住民が避難訓練に参加出来る環境が整備されていないことが、ワークショップ等から判った.
- ・ 外国人住民の経験談によると、避難所を探してみたものの行くまでに約 1 時間かかった.
- ・ 以上から、**外国人の住民や観光客をはじめ誰にとっても判りやすい「避難誘導方法」**が求められている.



高山市の防災情報入手方法

- ①高山市メール配信サービス
- ②高山防災ラジオ
- ③高山市行政防災無線
- ④高山市防災**SNS**
- ⑤道路・河川ライブカメラ
- ⑥河川の情報
- ⑦緊急速報メール



問題点

- ・ 設定しないと入手ができないもの
- ・ 存在を知らないと意味が無いもの
- ・ 防災の情報は分かってても避難先等はわからないもの

**防災対策はある程度存在するが、避難先までわかるものが無い
(どっちに行けば安全なのかがわからない)**



「提案：防災×街灯」

緊急時に安全な地点へ誰もが
分かる形での誘導が必要
(避難所まででなくとも比較的安全な地点への誘導)



現在，高山の街にあるもの
を利用するのがベスト

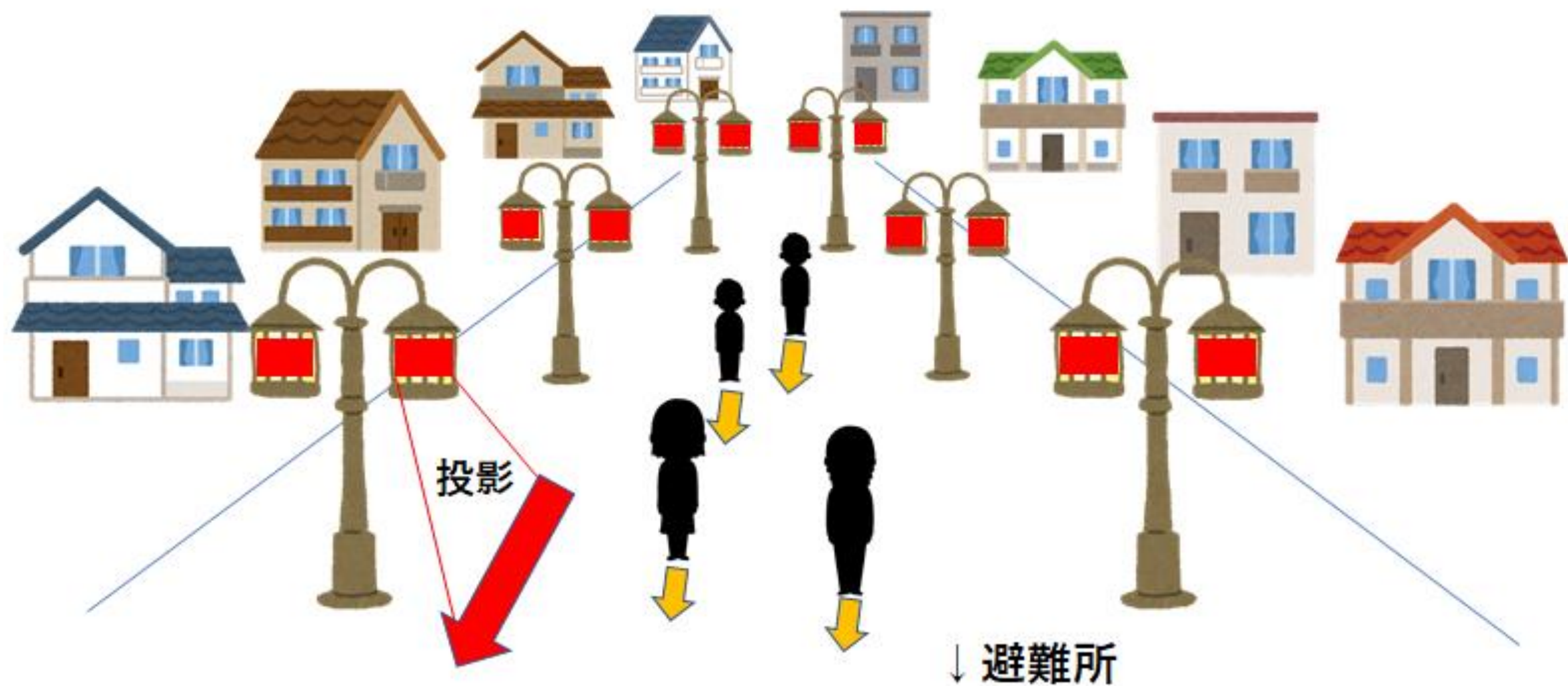


街のいたる所に設置されて
いた街灯を利活用するのが
効率的と判断



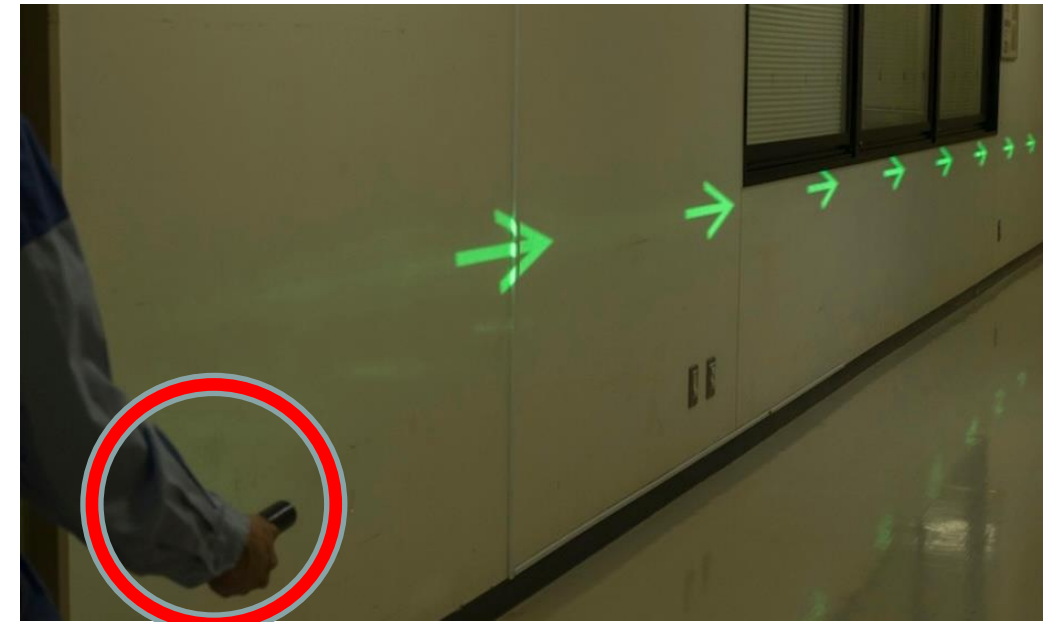
「提案：防災×街灯」

【緊急時】 プロジェクター技術と融合



小型照明装置を活用

- ・ DNP大日本印刷株式会社開発
- ・ 1台で数メートル先迄表示可
(設計により距離調整が可能)
- ・ 低消費電力で災害時も電池
で稼働



手のひらサイズの照明装置



(応用) 石英石を用いたマンホール

- ・ 電力が不要で夜間に光る
- ・ 誘導方向は矢印ではなく高山の魅力等を活かしたデザインにして、日中でも楽しいマンホールに
- ・ 12時間後も光っているので一晩は問題なし



電力が不要

太陽光やLEDに含まれる紫外線を吸収して自発光するため、使用電力がゼロです。



メンテナンスが一切不要

電気機器ではないため、部品の取り替えなどのメンテナンスが不要です。



ライフサイクルコストが安価
イニシャルコストも低く、メンテナンスなどの維持管理費が不要です。

<https://www.doppel.co.jp/products/alucial/>



どんな効果が生まれるのか？

- ・ 説明がなくても避難できる
- ・ 街並みを大きく変えずに防災対策ができる
- ・ 停電した際、街灯の代わりになる

→街灯が少ない地域では効果が発揮されにくい課題はある



現在の災害情報への問題

災害に対する価値観の相違

日本の災害に対する恐怖が伝わっていない(文化の違い)

災害時の対応に関しても連絡のしようがない(連絡網の欠如)



防災アプリの協働開発

- 災害時連絡手段の作成
(日本人と外国人の協働ワークショップ)
- 1、利用者側が作成に携わる
→ 痒い所に手が届く！！
- 2、日本では見えない災害時危険を再確認
- 3、地元の学生と海外の居住者をつなげる



多文化教育への着目

- ・ 小学校での多文化教育やおもてなし教育の取り組みが不十分で、今後の改善策が期待されている。
- ・ 自分の国の文化を話す機会がないし、日本人に対し伝えたいという意欲もある（外国人住民・談）。
- ・ 以上も含め、観光都市 兼 生活都市の高山ゆえに、幼少期から多文化への理解促進が必要である。



「提案：多文化教育」

展開例①：総合科目や委員会活動等で取り上げる

小学校や中学校の授業（特に総合科目）、またはまちづくりの委員会活動で、多文化共生を取扱う。

展開例②：まちの調査に関連する科目を展開する

実際に外国人住民へのインタビュー活動を必須として、母国について語り合ったり、高山市の魅力を語り合ったりするプログラムを展開し自分たちが住む高山市の魅力を相互に、再確認出来る。

展開例③：多文化共生都市の発信演習を展開する

外国人の観光客や在住者に対し、小・中学生の目線から高山市の紹介をするコンテンツを創り、インターネット上で発信する。②の調査結果を活用する機会にもなり、情報技術教育との相乗効果も期待出来る。



多文化教育の内容

具体的には. . .

地域の外国人住民に
インタビューをする



インタビューをもとに
英文を考える



高山市に訪れた観光客へ紹介



どんな効果が生まれるのか



多文化との交流
高山の魅力の再認識と発見



自国文化の発信
周辺住民との交流



- 👍 日本人目線ではなく住んでいる外国住民目線での魅力発見
- 👍 希薄になっている地域住民とのかかわりのきっかけに
- 👍 互いに地域の魅力を再発見し、よりよいまちへ

“住みよいまちは行きよいまち”を目指す



食への着目

- ・ 「多文化共生」という言葉の曖昧さ.
 - ・ 「多文化共生」は様々な文化の理解をすることであるが、**一見すると互いの何が良いか判りにくい**.
例：ナンプラーが理解してもらえない問題
- ・ 「食べ物」は全世界共通のもの。「食べること」は全世界共通のことであり、誰もが、楽しく触れ合える土台と考えられる.



「提案：食を通じた交流」

- ・ ①外国の食文化を知る場づくり
- ・ ②グローバル料理教室
- ・ ③広報への外国料理レシピ掲載

これら3つを通して、食を通じた海外文化への理解と交流の場づくりを行う



外国の食文化を知る場

- ・ 海外で売られている食材や調味料等を販売するマーケット
- ・ 試食や料理の販売をし外国料理の美味しさを舌で感じてもらう
- ・ 販売だけでなく料理教室や広報へのレシピ掲載と連携して、食企画を盛り上げていく



外国の食文化を知る場

- ・ 最初は、実証実験として試験的に開催し、反響が得られれば常設の店舗を開く
- ・ 昭和児童公園，城山公園等で開催
→ テントを用いて出店。
収益を次回への財源や支援活動へ
- ・ 祭り等に出店し，認知度を高める



グローバル料理教室

- ・ マーケットで販売されている輸入食品を扱った料理教室
- ・ イベントの企画の一つとして行い食事を通じた交流の場とする
- ・ 外国人の方でも気軽に参加できるように複数の言語のレシピや通訳を手配



グローバル料理教室～狙い～

- ・ 外国の食文化を知ることによって理解を深める
- ・ 輸入マーケットの食品を使うことでリピーターになってもらう
- ・ 日本人と外国人双方が教え合える交流の場づくり



グローバル料理教室 2つの内容

外国料理教室

- ・メインターゲット: 日本人
- ・日本で独自の進化をした料理との比較(カレー, 餃子etc...)
- ・外国人の方に味付けのアドバイスをお願いする

日本料理教室

- ・メインターゲット: 外国人
- ・郷土料理を扱うなど日本人でも参加しやすいように
- ・地産地消の食材を扱うなど, 高山の魅力再発見



広報へのレシピ掲載

- ・ 高山市の広報「広報たかやま」のコーナーの一つとして外国料理のレシピを掲載→多文化共生の意識付けに活用
- ・ 食材や調味料の購入できる場所も明記→市内の協力店の活性化へ
- ・ イベントと並行して料理コンテストを行い、優秀メニューを掲載して活性化



例えば…

- ・ 毎月対象の国を変えてレシピを掲載
- ・ 料理教室で一緒に作りコミュニティ創造
- ・ 日本人に馴染みのない食材をセットにしてマーケットで販売。外国人と作りインスタ投稿→特典

今月のエスニックレシピ

フォー・ボー 〜ベトナム料理〜



【材料】

米麺 600g
牛肉 500g チャンク、ランプ、ブリスケット。薄切り
玉ねぎ 2個 皮ごとグリルで15分で焼いて、皮をむき、4等分しておく
しょうが 5cm 玉ねぎと一緒にグリルで15分焼いて薄切り
八角 2個 クローブ 4粒
シナモンスティック 4cmくらい
黒コショウ 小さじ1/2
ニョクマム or ナンプラー 大さじ4
塩 少々 砂糖 少々
もやし 1袋 洗って熱湯に通す
万能ねぎ 4本 食べやすい大きさ
香菜 1房 食べやすい大きさ
スペアミント 1房 食べやすい大きさ
ビーフスープの素 少々
チリソース 適量 ライム1個 ジュースを絞る

【作り方】

1. 鍋に湯を沸かし、ビーフスープの素、焼いた玉ねぎ、しょうが、八角、シナモンスティック、クローブ、黒こしょうを入れて熱する。
2. 1にニョクマム、塩、砂糖を加えて味を調え、味噌などでスープをこす
3. 別の湯に湯を沸かし、米麺をパッケージの指示通りにゆでる
4. 3の麺の水気を切って1人分ずつおわんにいれ、生の牛肉を乗せる。2のきれいなスープを弱火で温めなおしておわんに注ぐ（スープで牛肉の色が変わる）
5. 4の上にもやしや万能ねぎ、香菜、チリソースなどの具・調味料を乗せ、絞ったライムを加えてできあがり

材料や調味料は食文化マーケットで販売
次回は〇月〇日 高山市民文化会館
ネットショッピングでも販売中
詳しくは www.〇〇〇〇〇〇



食をテーマとする事業の展望

- ・ 外国人の住みやすい環境を誰にとっても肝腎な食文化を通して整えることができる。
- ・ 高山市全体で外国の食文化が認知されるにつれて多文化共生を促進する料理店を増やし出店支援。日本人料理店が足を踏み込めるかが成功のカギ。
- ・ グローバルシティ高山としてブランディングし、国内外からの観光客を呼び込める。



能動的な態度の育成

地育的能動性

- ・ 高山市食伝統文化ワークショップ
→ 地域の地盤を固める

防災的能動性(前述)

- ・ 防災アプリ開発ワークショップ
→ 生活改善, 交流の活性化



多文化共生・国際化は地育から

- 故郷に自信と誇りを持つ力，そしてそれをはぐくむこと

- 概要

メインターゲット：高山住民＆学生

- 目的

自身の地域の魅力を再発見する。

高山市の魅力を知り，発信可能な人材を生み出すこと



「提案：合理的配慮の蓄積と共有」

「ゴミ捨てるのマナーで外国人は誤解されることが多いし、分別方法が判りにくい」

「ワークライフバランスの観点で公私の分類や各々の重みが日本と外国で違い戸惑う」

「日本の職場の風習や習慣の理解が難しく大変気を遣う」

「日本人は公平感も重視する。相手の空気を読むのも難しい雰囲気である」

「日本人は相手に迷惑をかけない文化であるが、助けるべきときは助けてくれる。エジプトとかだと迷惑をかけないとかは日本人ほど考えずに周囲を利用する。日本人にも、頼みやすい雰囲気がもっとあるとよいか」



「提案：合理的配慮の蓄積と共有」

- ・ 外国人側は日本人を相手にしてどう対応するのが良いかが判らない.
- ・ 故にケースごとに，高山の風土も考慮して外国人と日本人の双方がどのような心的態度で臨むことが合理的な方向になるか，シーンごとに事例も交えてまとめること，共有することにも必要になる.
- ・ 多文化共生への心的態度を改善して，3Cを促進する.
Communication～Consensus～Collaborationの流れを！



「提案：合理的配慮の蓄積と共有」

障害を理由とする差別の解消措置

差別的取扱いの禁止

障害があるということだけで、正当な理由なく、商品やサービスの提供を拒否したり、制限したり、条件を付けたりするような行為のこと。



合理的配慮の不提供の禁止

様々な場面で、事業所に対して障害者から何らかの配慮を求められた場合、事業所側は過重な負担がない範囲で、社会的障壁を取り除く配慮を行わなくてはならないということ。



外国の方にも声を上げてもらい合理的配慮を進め蓄積させる



おわりに

- ・ SDGsが、社会全体のテーマになりつつあり、インクルーシブな社会の実現は必須となる。
- ・ 西山は、高山市の誰にもやさしいまちづくり推進会議の会長を2018年6月から務めており、就任から3年以上が経過した。この委員会では、「住みよいまちは行きよいまち」を合言葉にしている。
- ・ 本研究活動の成果もふまえ、誰にもやさしいまちづくりを多文化共生も意識しながら推進する所存である。多文化共生が実現されれば高山は持続可能な行きよいまちになる

